

小池光・加藤治郎・花山多佳子・米川千嘉子  
鋭の四歌人が輪番で執筆する特別企画

# 20世紀歌人群像

## 10 土屋文明

加藤治郎

間もなく21世紀。  
近代短歌から現代短歌へ…  
短歌はこの100年でどのような足跡を残してきたのだろうか。  
24人の歌人にスポットをあてて20世紀の短歌を検証する。



### 第一章

### 人と時代

土屋文明は、一八九〇年(明治二十三年)、群馬県西群馬郡上郊村(現・群馬町)に生まれ、一九九〇年(平成二年)、百歳で没した。まさに二〇世紀を生きた歌人である。「あわただしき文明開化の落しものあはれなる名を一生持ちたり」(『統青南集』)という歌があるが、その名のとおり短歌の近代を担った歌人であった。

文明の父保太郎は、生糸や繭の仲買を本業とし、自前の食料を耕作する半農半商の生活を営んだ。後年、石炭事業に失敗し、家を売り故郷を捨てる運命にあった。また「僕の祖父といふのは博奕に身を持ち崩した揚句、強盗の群に投じ徒刑囚として北海道の監獄で牢死したのである」(『ふゆくさ』あとがき)という事実を知った少年文明は、村においていたたまれない思いをもった。それは負の遺産であり、後年の辛辣な人間の見方に繋がるものである。一方、貧しく暗い農村の追憶を、敗戦後の新しい生き方の拠点へと転換したことは、文明の強靱な精神の現われであるといえる。

一九〇九年(明治四十二年)四月、高崎中学校の恩師村上成之の斡旋で、文明は上京。本所茅場町の伊藤左千夫宅に寄食することになった。上京翌日、左千夫に伴われ、歌会に出席。斎藤茂吉・蕨真・古泉千樫・平福百穂ら、前年に創刊された歌誌「阿羅々木」の歌人に初めて会った。文明は、文学を志すとともに、左千夫の営む牛舎で労働に従事する。「牛飼が歌咏む時に世の中のあらたしき歌大いに起る」と左千夫が歌った九年後のことである。当時の様子は、後年「源森橋渡り箱車挽きてかへる我が仕事に就く手はじめなりき」

(『続々青南集』)、「薄荷瓶磨る路地の家に牛乳五勺くぼりゆきしは人知らざらむ」(『青南集』)という作品で回顧されている。

文学と生活が渾然とした環境。後の「生活即文学」という立言は、机上の箴言ではなく、生きた思想であった。長塚節の親友寺田憲の学費援助で第一高等学校に学び(一九〇九年九月)、一九一八年、島木赤彦の尽力により諏訪高等女学校に赴任し、二年後三十歳で校長



比叡山麓坂本の宿。前列左から文明・岡麓・中村憲吉。後列左から加納暁・島木赤彦。(大正14年)

になったという経歴まで含めて、文学丸抱えの生活であったといえる。赤彦からは教育者としての一面を継承し、大衆を啓蒙する指導者の資質を得たといえようか。一九二四年、松本高等女学校長から木曾中学校長への転任辞令(地元勢力の圧力による)を拒否し、単身上京した下宿先が「いろは館」と

いうかつての赤彦の「アララギ」編集発行所だったことも、浅からぬ因縁であった。

こういう人生を丸ごと呑み込む場としての短歌というありようは、現在では困難なことである。歌人にとって、生活の糧としての職業と精神の糧としての文学は分担され、二重の人生を送ることが強いられている。師弟関係といっても、そこには文学という明確な輪郭があり、お互いの生活には関与しないことが暗黙のルールのようになっている。「生活即文学」の本当の意味合いは、現在の我々からは理解の届かないものかもしれないのだ。おそらく、文学と生活が分裂した現在に生きる我々には、日常生活をテーマにして歌うこと程度にしか思い到らない。文明の血肉化した「生活即文学」とは、もっと深いなにかである。

一九二六年(大正十五年)の赤彦の死後、茂吉とともに「アララギ」を支えた文明は、一九三〇年(昭和五年)五月号より「アララギ」編集発行名義人となった。『万葉集』の研究、中国大陸旅行(作品は『菲菁集』所収)と特筆すべきことは多いが、文明の果たした最も重要な役割は、短歌を通しての敗戦後の精神の復興である。

戦時下「アララギ」は一九四四年(昭和十九年)十二月号まで刊行された(発送は翌年三月)。一月号は印刷されたものの、米軍の空襲にあって焼失。二・三月合併号の原稿も焼けてしまった。その後、四・五月合併号、六・七月合併号が編集され、印刷所も豊橋、仙台が用意されたが、ことごとく空襲に遭い果たせなかった。その間に文明宅も焼失し、結社運営にかかわる全てを失っていたのである。

これは、雑誌発行という範疇を超えた行為である。精神的レジスタンスといってよい。これだけ精神と行為の全てが注がれた時代の雑

誌をほかに知らない。敗戦の年一九四五年九月、文明は疎開先の群馬県吾妻郡原町（現・吾妻町）川戸から上京。九月十九日、発行所焼跡で五味保義と会い、九月号刊行の準備を開始したことは伝説的である。正岡子規の命日であったのも運命的である。

その復刊「アララギ」の「編集所便」は、毎号人々への熱い呼びかけとなった。九月号では、休刊の経緯が説明され、十月号では、今後の指針が述べられた。すなわち、「アララギ」として新しい時代に向かって日本文化向上のための仕事をどう実行したらよいか。作歌は吾々の全生活の表現であり、全人的活動であるから、作歌しつつ難局の実践が出来るかと訴えられた。翌年一月号では、生活の真実の表現こそが望まれ、そこに短歌として開拓されていない広い分野が在るとし、「思想以上の強力な生活が在る筈だ」と鼓舞された。健全かつ強靱な立言である。「アララギ」の会員に向けたメッセージであるが、その内容は、敗戦後の打ちひしがれた人々の精神の拠り所となり得るものであった。沈黙の斎藤茂吉と対照的であり、はつきり文明が戦後の「アララギ」を主導する形となった。

敗戦直後は、小田切秀雄・桑原武夫を初めとする第二芸術論が吹き荒れ、短歌は複雑な現実社会・近代精神を歌えず、芸術たり得ないと叩かれた。文明は「生活」を中心に据えて第二芸術論に對峙したのである。一九四七年十一月、名古屋における「短歌の現在及び将来」という講演にそのエッセンスはある。短歌は「生活の文学であり、生活即文学である」こと。そして「けっして一つの英雄を作り出す文学ではなく、一つの天才をめぐる文学ではなくて、同じ立場に立ち、同じ生活の基盤に立つ勤労者同士の叫びの交換である」こと。そういう短歌のありようは商業主義文学の先を行く姿である

という信念は「思想以上の強力な生活」に直結するものである。そして、今後の短歌のあるべき姿は「現実主義 (realism)」ということに尽きる」と結ばれた。

この理念は、戦後短歌の強烈な指針となり、現在に到る半世紀の短歌史を貫いたといえよう。思想あるいは芸術以上の強力な生活という主張は、今なお魅力的である。

## 第二章

### 歌と時代

土屋文明は、明治・大正・昭和・平成の時代を歌った歌人である。『土屋文明全歌集』（石川書房）所収の歌数は、一二、三四五首。歌集は、『ふゆくさ』（一九二五年）、『往還集』（一九三〇年）、『山谷集』（一九三五年）、『六月風』（一九四二年）、『少安集』（一九四三年）、『葎集』（一九四五年）、『山下水』（一九四八年）、『自流泉』（一九五三年）、『青南集』（一九六七年）、『続青南集』（一九六七年）、『続々青南集』（一九七三年）、『青南後集』（一九八四年）、『青南後集以後』（一九九一年）の十三冊と、未刊の『山間の霧』（同名の自選歌集は、『山間の霧より』『葎集より』『山下水より』『山下水より』から成り、一九五二年刊行）である。

この三朝あさなあさなをよそほひし睡蓮の花今朝はひらかず  
「ふゆくさ」

文明十九歳の作品。「アララギ」第二巻一号に発表された事実上のデビュー作である。この三日、朝ごとに装うように咲いていた睡蓮が今朝は花を開かない。繊細でリリカル（抒情的）な作品であるが、歌われているのは睡蓮の花の残像と追憶であり、眼前にはいのちを

終えてゆく花がある。結句の「ひらかず」という語調には、感傷だけではない、虚無を感じとつてよいだろう。「みあさあさなあさな」という韻律は美しく、至福感さえ伝わってくるが、「ひらかず」の濁音は余りに苦い。若さは、あるとき達観したかのような表現技巧と高い純度をもたらす。作品は、自ずと象徴性を帯びることになる。紛れない青春歌であるといえよう。

### 軍艦は出でたるあとの軍港に春の潮みちくらげ多く浮く

『山谷集』

### 横須賀に戦争機械化を見しよりもここに個人を思ふは

### 陰惨にすぐ

同

一九三三年（昭和八年）の作品。大正期のアララギ・島木赤彦を頂点とした世界から大きく踏み出そうとしていた。赤彦の「鍛練道」と呼ばれた倫理的な歌道から、人間の負の面・悪をも凝視しようという態度へ。また、観照的な自然詠から荒々しい都市の現実へとダイナミックに転換したのである。文明がそれを最も担った歌人であり、『山谷集』は、その代表的歌集である。これらの作品は、既に戦後の第二芸術論に耐え得る文体と思想を獲得していたといえるのではないだろうか。

一首めは「横須賀」一連より。軍艦は、という初句でその不在が際立つ。それを埋めるものは、春潮と海月。なんとも長閑な風景であるようにみえる。軍艦という長大なものと、海月というとりとめもない存在の対比が面白い。戦争と平和のメタファー（陰喩）を讀んでよいだろう。それにしても、この風景はナンセンスともいえるもので、ちぐはぐで壊れかけた世界が暗示されている。そこには、

軍艦を異化する批評意識があつたに違いない。

二首めは「鶴見臨港鉄道」より。機械化された大量殺戮よりも、眼前の重工業地帯に人間の存在を思うとき陰惨であるという。冷厳な認識であり、批評はこの世紀末まで届いているといえる。昭和八年は、小林多喜二が虐殺された年であつた。

文明の作品は、岡山巖らによつてノイエ・ザツハリツヒカイト（新即物主義）と評された。その源流は、一九二〇年代、第一次世界大戦後のドイツに起こつた芸術運動であつた。破壊された都市を眼前にして、芸術家たちに新しい〈物〉に対する意識が芽生えた。〈物〉は精密に描写されることで魔的なものが浸出し、現実が異化される。世界と人が孤絶してしまつたことが冷ややかに告げられたのである。文明の作品にある現実への抵抗と素材としての都市は、確かにノイエ・ザツハリツヒカイトと呼び得るものである。また、一九三〇年代は、日本のシュールレアリスム（超現実主義）が開花した時代でもあつた。軍艦や重工業地帯の風景は、例えば古賀春江の油絵「海」（一九二九年）に通じるものがあるといえる。『山谷集』は、同時代の思潮と共棲した歌集と位置づけられよう。

### 箱舟に袋も豚も投げ入れて落ちたる豚は黄河を泳ぐ

『葦菁集』

一九四四年七月から十二月にかけて、戦局の悪化する中、文明は陸軍省報道部の臨時囑託として、加藤楸邨・石川信雄とともに中国大陸に派遣された。戦意昂揚の作品制作という目的であつたが、文明はそれを遙かに逸脱し、中国の自然を社会を民族を自由に活写した。引用歌は「黄河の賦」より。箱舟は、黄河流域の交通手段であ

る。袋も豚も投げ入れるというところに、人民のエネルギーを日常が表現されている。黄河を泳ぐ豚はユーモラスであり、ここにも太い中国の底力が現われている。この中国の経験は、戦後の飛翔の助走ともいべきものであった。

### 朝よひに真清水に採み山に採み養ふ命は来む時のため

『山下水』

### 垣山にたなびく冬の霞あり我にことばあり何か嘆かむ

同

「アララギ」の活動を通じて敗戦後の精神の復興を担った時期の作品である。その核となるものは、この二首を典型として現われている「生活」と「言葉」である。

一首めには「六月十一日夏実へ寄書」と添えられている。夏実は、長男。終戦直前とは思えない瑞々しく晴朗な歌である。疎開先の川



東京・青山の自宅(昭和54年)

戸は、故郷から榛名山を挟んで対称の位置にある。暗い少年期の地方を、戦後を見据えた新しい生の拠点とした。二首めは「大和正田村」より。自然の景を前にして、言葉を自らの拠り所と確信する。自然とともにこの国の言葉がある限り、我々は大丈夫なのだ。雄渾に歌った。日本の戦後の輝かしい第一歩であった。

## 第三章

### 短歌史におけるポジション

土屋文明は、近代短歌の背骨である。伊藤左千夫・島木赤彦を引継ぎ、「アララギ」の先導者として敗戦という未曾有の危機を乗り切った。敗戦は、茂吉にとって悲劇であったが、文明にとっては劇的な飛翔の契機であった。

短歌における二〇世紀は、リアリズムの世紀であった。エコール（流派）を超えて継走されたのは「リアリティー」の一語であった。それが事実を拠るものであろうと幻想の記述であろうと、いかに迫真的であるかが創作と批評の要であったといつてよい。文明は、リアリズムを現実主義と訳した。その内実は「生活の文学」であった。茂吉が写生に過剰な信念を込めたのに対し、文明は「写生は、外界（即客観）から受ける知覚表象に重きをおく芸術製作上の傾向だといへるだらう」と实际的に定義している。ここにも文明らしきがある。現代短歌のリアリズムは、二重三重の修辭に包まれ、優しげな表情を見せている。文明の荒々しい文体と浪漫を削ぎ落とした抒情は、現代の地点から眺めると、むしろ異色である。文明は、真の前衛歌人であった。

(かとう・じろう 「未来」編集委員)

\*次号は前川佐美雄(花山多佳子筆)です。